

【研究ノート】

「創造的」である進化とは何でありうるか ——ベルクソン『創造的進化』におけるエラン概念

大森 隆暉¹

0. はじめに

本稿の目的は、アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859–1941) の『創造的進化』(1907, 以下 EC) の主に第 1 章における「エラン (élan)」概念の内実を明確化し、それがいかなる論証過程をもって導出されているのかをたどることにある。先取りしてその結論を述べると次のようになる。エラン概念とは、現代のダーウィニズムとも齟齬をきたさないような遺伝される生殖的な要素であり、進化のメカニズムに対してベルクソンの記憶力概念を導入するものである。またそれゆえに、その概念を中心とするベルクソンの進化論は、いわゆる生物の意識やその進化についての研究にも新たな視座をもたらすだろう。以下、なぜこのような論証整理を行うべきなのか、そして、そのような整理がベルクソン哲学に対していかなる制約を与えないかといった点を但し書きしておく。

まず、本稿での論証整理の有する意義は、次のようなものである。すなわち、ベルクソンの諸概念のうち、とくにエラン概念に対しては、多様な解釈がなされているように思われる。そしてこれらの解釈のうち、少なくとも明らかに誤った解釈²を斥けるためには、テキストに忠実に即した論証整理を行うより他ない。たとえば、エラン概念についての支配的な解釈や事典的な解釈が、ともすれば過度に神秘的にうつることも多いだろう。また、フランスのベルクソン研究として代表的な Worms(2004) の第 3 章は、生という概念を主な補助線として EC 全体の議論を明晰にする優れた先行研究である。しかし、個々の概念に対して

1 東京大学大学院総合文化研究科 Email: ryukiomori@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

2 このように解釈の正誤が問題とされるとき、「創造的誤読」と呼ばれるような事例による反論も当然想定されよう。しかし本稿は、村山(2017)にならい、あるテキストに対してそのような反論がなされるならば、そのテキストそれ自体の誤読は少なくとも認められたことになってしまうと応答しよう。なお、本稿での研究手法全体は、この村山(2017)に多くを負っている。

どのような意味が与えられているかを担保するところの論証整理が、少なくとも明示的にはなされていないように思われる。エラン概念についてはその傾向がとくに顕著である。もちろん、以下の議論でも参照される最近の日本での諸先行研究³と本稿との議論の方向性や結論は共通している部分もあり、本稿の研究はこれら先行研究の成果に多くを負っている。しかし、いわば分析的にベルクソンの論証整理をなしておくことは、これまで以上に、ベルクソンのテキストそれ自体に対する解釈の過剰充填を避けることにつながるだろう。

また、本稿での研究は、なるほどたしかにベルクソン哲学と現代哲学や諸科学との接合を促すものではあるが、それによって、ベルクソンの豊かな言説が損なわれるわけではない。具体的には、本稿での論証整理から生じるエラン概念を中心とする諸概念の内実⁴は、結果的に⁵いわゆる存在論的自然主義(物理主義)とも親和的なものになっている。しかしながら、そうした物理主義者が認めるような概念のみが結果的に提示されたからといって、ベルクソンの重視する創造性やテキスト上の「厚い記述」が損なわれるわけではない⁵。むしろ、ベルクソン哲学と多様な分野とのさらなる協働につながるはず

3 これら諸先行研究のうち、米田(2021a)での議論と本稿でのそれが大いに重複しているように思われるかもしれないので、それらの共通点と相違点を先んじて取り上げておく。以下の本稿の議論をたどるにあたって、この注釈を随時参照されたい。まず、議論の方向性とその結論はおおよそ同様のものである。すなわち、ベルクソンによる当時の諸進化論の評価を介してベルクソンの諸概念が進化論に対してどのようなことを補ったのかという点を論じていること、そうした諸概念を『物質と記憶』(1896)での議論によって補っていること、ラマルク主義の努力概念とベルクソンのそれとの違いを強調することなどが共通している。たほう、各々の論考では、注目している諸概念とそれらに対する解釈が少し異なる。たとえば、米田(2021a)では適応や再認といった概念の分析が中心となる一方で、本稿ではエランや推進力、(心理的な)原因や運動などの概念が主に分析される。それらは、もちろん米田(2021a)でも緻密な分析がなされており、そうした内実と本稿の内容が齟齬をきたすわけではない。ただし本稿では、エラン概念や推進力概念、「なまの物質に作用する傾向」(EC 97/130)を(ともすれば執拗に)区別する解釈をとっているほか、米田が適応概念をもって論じていることの一部を、「ある種の努力(quelque espèce d'effort)」という概念(EC 87/119)によって論じている。

4 この「結果的に」という語が重要であり、本稿では、「物理主義をとるから、それに親和的なテキストを恣意的に抽出する」という立場が取られているわけではない。そもそもベルクソンは、当時の諸科学の成果を積極的に前提として使ったのだから、それらと親和的な概念が結果的に導出されたとしてもそこまで不思議なことではないだろう。

5 この点は、米田(2021a)でもベルクソンの再認概念をもって注意が促されており、注目に

であり、それこそ彼自身が提唱した「実証的形而上学」という態度⁶であるように思われる。

以上の意義や諸注意に留意しつつ、以下、本稿の目的たるエラン概念の分析(ひいては、ベルクソン独自の進化論の分析)を順に進める。まず第1節では、エラン概念の登場箇所を順に概観することを通じて、それが「推進力(impulsion)」という概念と密接な結びつきがあることが確認される。次の第2節と第3節では、この推進力概念の内実が順に分析される。その内実は、第4節で分析されるECのある一節によって補完され、第5節ではECの最終節の論証整理を通じてこれまでの諸概念規定のさらなる根拠が補われる。

1. エラン概念と推進力概念との論理的関係について

前述のとおり、エラン概念はEC以降しばしば登場するため、一見すると多様な解釈を容れるものであるように思われる。しかし、本稿の目的は、エラン概念がいかなる論証をもって導出されたのかを明らかにすることである。それゆえ、この概念の登場箇所をたんに恣意的に取り出して論じることは、論点先取であるとの誹りを免れえない。したがって、さしあたり順を追って、エラン概念がどのように説明されているかを概観する。以上の点に注意しつつ、最終的に本節では、エラン概念と推進力概念との間の論理的関係を明確にし、後者の概念を以降の節で概観することが前者の概念分析にも寄与することを示唆する。ここでの二者の論理的関係を前提として、以降の節での論証整理がなされることに、常に留意されたい。

ECにおいてエラン概念が初めて登場する一文は、「まさにそこで、われわれが自身を超えて高めるために必要なエランを受け取るだろう⁷」というものであ

値する。

6 これに関連する論点がECには多く含まれている。本稿や米田(2021a)で確認されるように、ベルクソンは、エラン概念を中心とする独自の進化論によって、生命のある種の創造性や目的性を担保している。たほう、いわゆる科学的認識や営みが、この世界においておおよそ上手くいっているように思われることについては、少なくともECにおけるベルクソンは、存在論的自然主義とも関連するような議論をもって応答を試みている。この点に関しては、杉山(2006)の第2章/第6節を参照されたい。

7 EC 49/75.

る。この文の「そこ」において、エラン概念が存することが確認される。直前の記述を見るに、「そこ」は「進化しつつある原理のうち、われわれの有機的組織化の特別な形式に狭められずに密かに入り込んだ部分⁸」、あるいは「暈 (frange)」と呼ばれる。では、この暈という比喩的な表現は、より具体的には何を指すのだろうか。その直前の議論を見るに、生命が脊椎動物一般へと進化する際、その進化と両立しないがゆえに捨てられ、別のいくつかの発達の線に任せられた要素⁹を把握し、知性と融合させるものが暈¹⁰だとされる。なお、ここでいう要素のさらなる説明は、EC 417 に示されるように、第 2 章での生物の諸進化についての議論において散見されよう。EC 第 2 章での諸議論とエラン概念との関係についての検討は、米田 (2021b) などに譲り、以降本稿では、2 番目に登場するエラン概念の分析を進める。

EC においてエラン概念が 2 番目に登場するのは、EC 50-53/76-79 にまたがる長い段落においてである。より厳密には、ベルクソンのいう適応の内実について説明された次の一部分である。

各々の種、そして各々の個体すらも、生命の推進力全体で保持しているのは、あるエランだけである。また、このエネルギー¹¹を自身の利益になるように使う傾向がある (*chaque espèce, chaque individu même ne retient de l'impulsion globale de la vie qu'un certain élan, et tend à utiliser cette énergie dans son intérêt propre*)¹²。

上記引用から、次のような論理的推論を行うことができる。すなわち、生命の推進力が存在するならば、あるエランだけがそこにおいて保持されている¹³。

8 EC 49/75.

9 EC 49/74-75.

10 暈について本稿でこれ以上の解釈を施す紙幅はない。さらなる解釈については、三宅 (2012) の 156 頁などを参照せよ。

11 なお、このエネルギーと推進力という二つの概念は同一のものではないが、その関係については後述する。

12 EC 51/76-77、強調引用者。

13 言うまでもなく、エランが存在するならば推進力が存在するという逆の推論を行うことは許されない。

この推論を本稿では重視し、第2節と第3節では、推進力という概念の内実を分析することをもって、エラン概念の分析を進めることとする。

2. 推進力概念について（その1）

前節での論理的推論に基づき本節で確認すべきことは、EC前半での推進力概念にかんする議論をたどると、その概念がアウグスト・ヴァイスマン（August Weismann, 1834–1914）的な立場に基づいているとの解釈をなしうるという点である。

まず、EC 51/76–77以前の箇所から、推進力概念の内実を検討する。この語がそれ以前では2ヶ所（EC 40/63とEC 27/49）登場しているが、前者は明らかに別の文脈で用いられているので、ここでは後者に注目する。後者を含む箇所では、「〔…〕このエネルギーは、胚状態の生に推進力を与えるときだけ、ほんの一瞬使われる（*cette énergie ne se dépensant que quelques instants, juste le temps de donner l'impulsion à la vie embryonnaire*）。そして、このエネルギーは、できるだけ早く、新たな生殖的要素において取り戻され、そこで次の機会を待つ¹⁴」と論じられている。この箇所から、次のような論理的推論を行うことができる。すなわち、「このエネルギー」が使われるならば、胚状態の生に推進力が与えられている。この推論を本稿では重視し、以下、「このエネルギー」の内実をたどることとする。

「このエネルギー」について、その語が登場する直前の議論では次のように説明される。すなわち、「受精卵の生殖力（*pouvoir génétique*）」に対応し、胚においてみずからの何かを集中させること¹⁵、「生殖質（*plasma germinatif*）」にはない連続性が認められること¹⁶、などである。ここで、これらの「このエネルギー」についての説明の前後で紹介されているヴァイスマンの「生殖質の連続」説のベルクソンによる解釈¹⁷が、「このエネルギー」の内実を理解するために重要だ

14 EC 27/49、強調引用者。

15 EC 27/48–49。

16 EC 27/49。なおECにおいて生殖質が登場する箇所は、全てヴァイスマンに関わるものであったことを付言する。

17 なお、ヴァイスマンの説それ自体についてのベルクソンの要約は「生み出す側の有機体の生

とみなすことは許されよう。とくに EC 26-27/48-49、そして諸先行研究の成果¹⁸をも鑑みるに、ベルクソンが生殖質の連続説において重視した論点は次のようなものであるように思われる。すなわち、なるほどたしかに、生殖質の連続説を根拠とする事例が例外的であることをもって、生殖質の連続性を認めない立場をとることはできるかもしれない（生殖質の連続説それ自体への反論は可能かもしれない）。しかしそれでも、生殖のエネルギーなるものの連続性は未だ認められる。このようにベルクソンは、ヴァイスマンの説のように、主に胚において生殖にかんする連続的な遺伝がなされるという立場には少なくとも同意する。そしてこのような状況こそが、推進力が与えられていることだとされる。こうしたベルクソンのヴァイスマン解釈を重視するならば、推進力やエネルギーといった諸概念の導入は、ヴァイスマン的な立場に同意しつつ、かつ彼に対する反論を回避するための策であったようにも思われる。ともあれ、EC 51/76-77 以前から導出できる推進力概念の内実の検討を終えたものとし、それ以降に登場する推進力概念の概観を行う。

3. 推進力概念について（その2）

第1節での論理的推論に基づき本節では、次のような解釈を提示することを目的とする。すなわち、EC 後半での推進力概念にかんする議論によると、その概念が、ベルクソンの指摘する当時のダーウィニズムの不備を補完するものであり、かつ、ベルクソンの意味での心理概念に対応するものである。

推進力概念が、EC 51/76-77 以降で登場する箇所は大別して3ヶ所ある。順に、①（EC 55/82）、②（EC 73/103）、③（EC 86/116）とする。以下、各所の概観をもって推進力概念にとっての妥当な内実は何であるかを検討する。

①での推進力概念は些か比喩的に使われているので、これが含まれている段落全体（EC 53-55/80-82）を三分割し、それぞれ詳細に検討する（この段落にはエランという語も多く含まれており、その理解にも資するものである）。ま

殖的な諸要素が、それらの特性を、生み出される側の有機体の生殖的な諸要素へと直接伝える」（EC 26/48）というものである。また、このヴァイスマンの理論的影響を踏まえてベルクソンの遺伝モデルを再構成した研究として、米田（2016）が挙げられる。

18 たとえば、三宅（2012）の157頁や、米田（2016）の150頁などを参照されたい。

ず、EC 54 の 8 行目 /81 の 4 行目まで ([...] de suite indéfiniment) の内容については、エランの連続性をもって生命の進化の多様性を説明するものであり、この内容は先に取り上げたベルクソンのヴァイスマン解釈を鑑みればとくに不整合であるようには思われない。しかしそれ以降から EC 54 の 21 行目 /81 の 11 行目まで ([...] dans des organismes très différents) の内容は、一見するとこれまでの議論との不整合をきたしているように思われるかもしれない。たとえば、進化の原因が「心理的な本質 (nature psychologique)」であり、その原因は「共通する何らか (quelque chose de commun)」を保存するとも述べられる。このような記述を整合的に解釈するためには、ベルクソンが心理的な本質や心理的な原因と述べるとき、それらがおおよそ「記憶力 (mémoire)」に対応することに注意を払うべきだろう¹⁹。さらに、彼が記憶力と述べるとき、まさにそれは、平井の言う「過去が保存されるという事態をもたらしている、時間そのものが有する仕組みのことであり、非人間的・心理的な働き²⁰」であるとみなされるべきだろう。つまり、ここでベルクソンが進化の原因として想定しているのは、(たんに神秘的な心的概念などではなく)、時間そのものが有する仕組みによって、各々の生命にとって共通する過去が保存されるという事態であるにすぎないように思われる。最後に、EC 54 の 21 行目 /81 の 11 行目から EC 55 の 11 行目 /82 の 8 行目 ([...] qu'on trouverait sur elles) までの内容は、次のようなものである。すなわち、ベルクソンの理解するところの、当時のダーウィニズム的な機械論によると、進化は「一連の偶発事 (une série d' accidents)」の蓄積によって生じるとされる。たほう、全く異なる経緯で進化した二つの生物における器官が類似しているという事実²¹を、この蓄積のみによって説明することは困難で

19 この点は、EC 418 の注 146 でも述べられている。また、これ以降の EC でも、テオドール・アイマー (Theodor Eimer, 1843–1898) を批判する文脈や「ある種の努力」という概念をベルクソンが導入する際に詳述される。これらについては本稿でも後に詳しく検討する。

20 平井 (2018)、231 頁、強調は平井による。また、この点は主に、『物質と記憶』において盛んに取り上げられた論点であるが、EC においても、「記憶力 (mémoire)」と「記憶 (souvenir)」との区別を前提とした上で取り上げられている箇所がいくつかある。たとえば、EC 168/214–215 などを参照せよ。

21 この例として EC でしばしば取り上げられるのは、ヒトの眼とホタテの眼の類似である。しかし、ここで次のような疑問が生じるかもしれない。すなわち、そのような事例をもってベルクソンが進化論の不備を指摘しているならば、彼の進化論についての理解は過去の遺物にすぎない

あるように思われる。それゆえ、機械論的な立場をもって進化の仕組みは説明しきれない。つまり、(機械論的な成果は踏まえつつも) こうした器官の類似を説明するために、末端の諸分流においても見つけられるところの、水源で受け取られた「推進力のうちの何らか (quelque chose de l'impulsion)²²」という概念を導入したのだろう。以上によって導出される、①での推進力概念の内実は次のようなものである。すなわち、その概念は、ヴァイスマンの理論や当時の不十分なダーウィニズムをも踏まえつつ、それらによって説明しがたいとみなされた諸生物の器官の類似などを、記憶力概念などによって説明するためのものである。

②では、原因や因果性という概念を三つに区別する文脈において、impulsionが登場する。しかし、ここでの impulsion については、「結果の量と質が、その原因の量と質に応じて変化する²³」ところの因果性に対応する概念として用いられている。こうした因果性の概念分析は、ベルクソンが当時の機械論的な進化論の不備を指摘するために介した重要な議論ではある²⁴が、エラン概念と直接関係する仕方で用いられた文脈ではないので、本稿で詳細には取り上げない²⁵。

③では、①の後半と同様の議論がなされている。すなわち、生命の変異の原因が、各個体の胚の差異であるとのダーウィニズム的な立場の一部は少なくとも正しい。しかし、それらの差異が「たんに偶然的で個別的」であるにすぎな

のではないか。たとえば、現代のダーウィニズムでは、自然選択の理論だけで眼の進化について説明できていないのではないか(例:レーン(2010)の第7章)。こうした疑問に対する本稿での端的な応答としては次のようになる。すなわちベルクソンは、進化を説明するにあたって、(機械論が主に重視する)「器官の進化」と(目的論が主に重視する)「機能の進化」とが混同されることに概念的な不整合があると懸念していた(EC 61-62/89-91)。そこで、両者を区別した上で、当時のダーウィニズムの成果と自身の概念とを包摂したような進化論を提案した。そのような進化論は、おそらく現代の進化論とも整合的なものである。

なお、EC 50/76などを鑑みるまでもなく、ベルクソンはある種の目的性を当時の進化論に対して付していたわけだが、生物学史を踏まえて彼のいう目的概念を分析したものとして、三宅(2012)の146-149頁を参照されたい。

22 EC 55/82.

23 EC 74/104.

24 その重要性を重んじてベルクソンの進化論を再構成した研究として、先の米田(2021a)が挙げられる。

25 つまり、本段落でなされているように、2で登場する impulsion を、推進力と訳出すべきではないだろう(現にほとんどの邦訳では、推進力以外の語で訳出されている)。

いというダーウィニズムの見解に対しては、ベルクソンはこれを不十分だとみなす。この不十分な見解を補完するために、彼は、それらの差異は「諸個体を介して胚から胚へと伝わる、ある推進力が発達したもの (*développement d' une impulsion qui passe de germe à germe à travers les individus*)²⁶」だと考える。つまり③では、推進力概念がたんに偶然的で個別的なものではないとされるが、①での記憶力概念と推進力概念との結びつきを鑑みれば、③での議論も妥当であると見なして差し支えないだろう。

以上をもって、推進力概念を補助線としてエラン概念の内実を明らかにする試みは終えられた。それと同時に、EC 第1章においてエラン概念が登場する箇所分析もほとんど²⁷ 終えられた。本稿での目的を満たすためには、EC 第1章の最終節たる「エラン・ヴィタル」²⁸ の分析だけが残されている。しかし、①でベルクソン独自の概念として導入されたところの心理的なものについての詳細が、③を含む節たる「議論の結果」²⁹ において、アイマーやネオ・ラマルク主義を批判しつつ検討されているので、先にその点を概観する。

4. 「議論の結果」という節による補足

本節では、EC の「議論の結果」という節での諸議論のうち、とくにベルクソンのいう心理的なものを補足するような箇所を概観する。それによって、前節の①や③での議論や、そこで登場したベルクソンの心理概念（ここでは、「あ

26 EC 86/116.

27 ただ1ヶ所、EC 80/111 に登場するエラン概念の分析が終えられておらず、以下に補足する。それは、いわゆる獲得形質の遺伝が、仮に経験的に確証されるにせよ、そもそもそこで遺伝されると考えられる「習慣 (*habitude*)」の概念を細分化する必要がある、という文脈である。たとえば、後天的に身に付けられた習慣と、そうした習慣のいわば基礎になるような生得的な傾向のようなもの（これをベルクソンは、「ある自然な諸傾向 (*certaines dispositions naturelles*)」と呼ぶ）とを区別すべきだとベルクソンは述べる。この自然な傾向が胚を介して遺伝する際の原因として、エラン概念が登場している。つまり、ここでのベルクソンの主張を要約すると次のようになる。すなわち、後天的な習慣そのものが遺伝するとは考えられないが、そうした習慣のベースになりうる生得的な傾向が遺伝することは大いに考えられる。そして後者の遺伝の原因として、エラン概念が導入される。

28 EC 88-98/119-131.

29 EC 85-88/115-119.

る種の努力」と主に呼ばれる) がより明確にされる。

まず概観する議論は、アイマーらの主張する定向進化を批判したものである。これに対するベルクソンの批判は次のようなものである。すなわち、一般的な定向進化説が主張するように「様々な諸形質の変異が、世代から世代へと、決まった方向で続けられる³⁰⁾」ことは少なくとももっともらしい。しかし、そのことが「物理的・化学的な諸原因の組み合わせによって十分保証される³¹⁾」という主張は疑わしい。そうではなく、進化とは、「ある心理的な原因 (une cause psychologique)³²⁾」が介入するものであるに違いない。

ここでの議論の構造としては、①や③で概観されたような、機械論的な進化論の不備をベルクソン自身の概念で補うというものであることが確認される。それゆえ、ここでいう「ある心理的な原因」が、①や③でのそれと同様の役割を担っていると見なして差し支えないだろう。

この「ある心理的な原因」の内実が詳述されるのは、次段落のネオ・ラマルク主義³³⁾の批判においてである。この批判はおおよそ次のようなものである。すなわち、ネオ・ラマルク主義が認めるような原因が、「個体の意識的な努力 (effort conscient de l'individu)³⁴⁾」であるならば、まさに意識的な動物にしか適用されないこととなり、そうした原因概念は適用範囲の狭いものとなる。また、獲得形質の遺伝についても、それが有意に規則的な現象であるようには思われない。こうした不十分な原因概念に代わってベルクソンが提示するのが、「ある心理的な原因」であり、この段落では「ある種の努力 (quelque espèce d'effort)」と換言される。その内実については、「個体の努力よりもいっそう深く、諸環境から

30 EC 87/117.

31 EC 87/118.

32 EC 87/118.

33 EC 77-78/107 において、ベルクソンは(ネオ・)ラマルク主義を要約して紹介しているが、その内容は端的には次のようなものである。すなわち、ラマルク主義者たちは、新種を生み出すような変異の原因は個々の生物の努力(いわゆる獲得形質)から生じると考える。とりわけ、エドワード・ドリンカー・コープ(Edward Drinker Cope, 1840-1897)を代表とするネオ・ラマルク主義者たちは、この努力を意識的・意志的なものと見なしている。ちなみに、金森(2004)の178-179頁では、このようなコープ的な努力概念とベルクソン哲学との近さが指摘されている。たほう本稿では、ベルクソンの努力概念とネオ・ラマルク主義者たちのいう努力概念との違いが強調されていることに注意されたい。

34 EC 87/118.

著しく独立しており、同じ種のうちのほとんど全員に共通しており、それら自身というよりむしろ、それらが有する胚に内包されており、以上によってたしかにそれらの子孫へと伝わる³⁵⁾と説明される。これら説明が、①や③での分析とおおよそ一致することは明らかであろう。

5. 「エラン・ヴィタル」という節での議論の整理

以下では、EC 第 1 章の最終節たる「エラン・ヴィタル」での諸議論を概観し、これまで分析されたエラン概念の内実との整合性を検討する。それによって、推進力概念をある種の補助線として分析されたエラン概念の内実が、EC でエラン概念それ自体について最も主題的に論じられている最終節での議論と対応することもまた、明らかになる。本節で主に検討するのは、エラン概念が含まれているところの、最初の段落 (EC 88-89/119-120) と、最後から 2 番目の段落 (EC 97-98/130-131) である³⁶⁾ (議論の便宜のために、以下、前者を α とし後者を β とする)。

α においては、一見すると、ともすれば奇妙で神秘的にうつる議論が多く散見されることだろう。しかし、これまでの①や③、「ある種の努力」概念に対する解釈を充填すれば、そのような懸念は生じない。つまり、ベルクソン特有の「はずみ (élan)」や「原因 (cause)」といった概念の字面に注目するのではなく、それら概念に対して、ベルクソンがどのような意味を対応させているのかを重視すべきである。たとえば、「諸々の進化の道すじにおいて分かつたれつつも、それらにおいて保たれているところのエランは、——少なくとも、規則的に遺伝され、累積され、新たな種を創造するような—— 諸々の変異の、深い原

35 EC 87/119.

36 もちろん、これ以外の段落を分析する必要はないのかという疑問が生じるだろう。このような疑問に対するさしあたりの応答は次のようなものである。すなわち、これ以外の段落では、たとえば眼の進化を説明する際に、その進化の生成的なプロセス (ベルクソンはこれを主に「運動 (mouvement)」と呼ぶ) が、機械論も目的論も捉えておらず、この点で当時の諸進化論には不備があると説明されるにすぎない。このようなベルクソンの運動概念はエラン概念とも関係があることが後に示唆されるが、紙幅の関係上、その詳細な分析は前掲の三宅 (2012) の 146-149 頁を参照されたい。

因である³⁷⁾といった主張についても、一見すると神秘的であるにすぎないように思われよう。しかし、ここでいうエランが①や③での内容に対応し、(ベルクソンの意味での)原因が①での心理的な本質や記憶力といった概念、そして「ある種の努力」概念などに対応するとみなせば、それらが不整合な概念でもなければ、今日的な諸科学の知見と不整合であるわけでもないことが認められよう。

β では、「視覚への歩み³⁸⁾」と呼ばれる事例を介し、これまでのエラン概念の内実を踏まえつつ新たな概念規定がなされる。なお、この「視覚への歩み」とは、直前の記述を見るに、「原因が視覚へと向かうこと³⁹⁾」である。 β において、この事例とエラン概念との関係について主題的に論じられているのは、次のような箇所である。(以降の論証整理の便宜のため、この箇所を三分割し、それぞれにⅠ、Ⅱ、Ⅲと付した。)

(Ⅰ) 視覚への歩みは、生命の根源的なエランによって行われる (elle [= la marche à la vision] s' effectue en vertu de l'élan originel de la vie)。 (Ⅱ) また、視覚への歩みは、その運動それ自体のうちに含まれている (elle [= la marche à la vision] est impliquée dans ce mouvement même)。 (Ⅲ) そして、まさにそれゆえに、視覚への歩みにおいて、独立した諸々の進化の道すじは見出される⁴⁰⁾。

以上の箇所からは (Ⅰ ∧ Ⅱ → Ⅲ) という推論が取り出せるが、この推論は真なのだろうか。一見すると、Ⅰという前提だけでもⅢは十分導出されるように思われる。むしろ、Ⅱという前提がどのようなことを指しており、Ⅲのような帰

37 EC 88/119.

38 EC 445 の、この事例に対して付された注では、この事例がベルクソンの運動概念を踏まえて論じられていることが紹介されている。この運動概念の解釈については、やはり前掲の三宅 (2012) の 146-149 頁を参照されたい。

39 言うまでもなく、ここでの原因が、ベルクソンの意味での「原因」であることに注意が必要である。

40 EC 97/130. なお、この直前の一文で、「視覚への歩み」は意識的または無意識的な表象を求めるものではない、との但し書きがなされていることも注目に値する。この点が、本稿で先に概観されたネオ・ラマルク主義へのベルクソンの批判と近い指摘であることが認められよう。

結がどうして生じるのかが、この時点では十分に明らかではない。そこで、IIのように主張できる理由について説明された直後の一文をたどる。

今や、ひとはわれわれに対して、なぜ、そしていかにして視覚への歩みはその運動それ自体のうちに含まれているのかと尋ねるかもしれない。このような疑問に対して、われわれは次のように応答するだろう。すなわち、生命とは、何よりもまず、なまの物質に作用する傾向 (*une tendance à agir sur la matière brute*) である、と⁴¹。

なお、「なまの物質に作用する傾向」は、「前もって決められているものではないため、それによって、進化しつつある生命が、その進化の道すじで拡散させるところの諸形態の予見不可能な多様性が生じる⁴²」と説明される。また「偶然という性質を帯び、少なくとも選択のきざし (*rudiment de choix*) を含む⁴³」とも説明される。以上の説明や諸々の先行研究⁴⁴を鑑みるに、この「なまの物質に作用する傾向」は、ベルクソンのいう運動概念の内実のうちの一つと見るべきだろう。つまり、「生命とは、なまの物質に作用する傾向である」とベルクソンが述べる時、生命がベルクソンの意味で運動しているという論点が導入されているように思われる。

以上の分析によって、 β における推論 ($I \wedge II \rightarrow III$) では、ベルクソンの二つの論点が導入されていることが明らかとなった。すなわち、Iにおいて、エラン概念によって視覚への歩みという進化現象の説明が試みられ、そのことによって(記憶力やある種の努力概念などを含む)ベルクソン独自の進化論が導入された。またIIにおいては、生命に対してベルクソンの運動概念たる「なまの物質に作用する傾向」という概念が導入され、当時の機械論や目的論的な

41 EC 97/130.

42 EC 97/130.

43 EC 97/130–131. なお、ここでいう選択について、「とりうるいくつもの行動を前もって表象すること」とすぐ後で説明され、そのような議論は既に『物質と記憶』の第一章でなされたとの原注が付される。この補足によっても、「なまの物質に作用する傾向」と運動概念との関係を見出すことができよう。

44 たとえば、三宅(2012)の148–149頁や、米田(2016)の157頁などが、「なまの物質に作用する傾向」とエラン概念、運動概念との関係を強く示唆している。

進化論との差別化がはかられた⁴⁵。そして、これら I と II によって III が導出されている。つまり III は、これまで本稿で主題的に論じられた I のような論点と、『物質と記憶』などでも既に論じられたところの) 運動概念が導入された II の論点を包摂した主張であると言えよう。

6. 結論と補足

冒頭で述べたように、本稿での結論はいわば地味であり、ベルクソン哲学の識者にとっては当たり前のものであろう。しかし、そのような結論がいかなる論証過程を経て導出されたかを明示的にしておくことは、多くの者にとって重要な意義を担うはずである。以下、本稿でなされた議論とその結論を簡潔にまとめらる。

第 1 節では、エラン概念の登場箇所を順に概観するなかで、「推進力という概念があるとき、そこではエランだけが保持されている」という推論が確認された。この推論を重視し、第 2 節ではその推論以前で、第 3 節ではその推論以後で、推進力概念が登場する箇所を概観した。その結果この概念の内実は、(ヴァイスマンの説が示すように) 主に胚において連続的に遺伝する生殖にかんするものや、進化のメカニズムに対しての「心理的な原因 (=記憶力)」という概念に対応すると明らかになった。この対応関係が妥当であることは、第 4 節で詳述された「ある種の努力」という概念によってより確かなものとみなされた。第 5 節では、以上の推進力概念の内実とおおよそ対応する議論が EC 第 1 章の最終節にあることが確認され、かつ、それらの概念のいわば基礎にベルクソンの運動概念が存することも確認された。

以上から導かれる本稿の結論は次のようなものである。すなわち、推進力概

45 付言すると、I は「視覚への歩み」がエラン概念によってなされるという主張であり、II は「視覚への歩み」は運動概念に含まれるという主張である。それゆえ、運動概念の外延をどれほど広くとろうとも、(たとえエラン概念と運動概念が似たような役割を担っているにせよ)、それらを同一のものとみなすことは、少なくとも許されないだろう。また、それらが同一でないならば、運動概念の事例のうちの一つであるところの「なまの物質に作用する傾向」とエラン概念もまた、少なくとも同一のものではない。もちろん、(進化という現象の一部を指すところの) エラン概念もまた、ベルクソンの意味で運動していると述べることも自体は妥当である。

念とも換言されるところのエラン概念は、胚において連続的に遺伝する生殖的な何らかであり、いわゆる進化のメカニズムにとっての心理的な原因（≡ベルクソンの意味での記憶力）である。また、そうした意味での進化全体や個々の生命の進化・変異の過程を説明する概念として運動概念があり、後者の過程の代表例が「なまの物質に作用する傾向」である。

こうした意味でのエラン概念は、冒頭で述べたように、現代の進化論や生物の意識の進化についての研究とも親和的であろう⁴⁶。それゆえ、本稿での概念整理は、近年盛んなベルクソン哲学といわゆる分析哲学や現代諸科学とを協働させた諸研究に対しても、貢献が見込まれよう。

たほう、そのような他分野との協働とは別に、本稿での成果を活用して取り組まれるべき今後の課題があろう。すなわち、本稿での EC 第 1 章を中心としたエラン概念についての論証整理と同様の方法を、EC の第 1 章以外の章はもちろん、ベルクソンの最後の主著たる『道徳と宗教の二つの源泉』（1932）に対しても網羅的に適用すべきだということである。とくに後者では EC とは大きく異なる哲学的な諸問題が論じられているように思われるので、このような網羅的な整理を行い、ベルクソン哲学全体においてエラン概念の内実がどれほど連続的なのかを検討しておくことは必要だろう。

参考文献

Bergson, Henri (1907/2013) [EC], *L'Évolution créatrice*, PUF, édition critique.

(EC については各種邦訳を参照した。引用の際は、原文の頁数のあとにちくま学芸文庫版の合田正人・松井久訳（2010）の頁数を付した。ただし、原文のみに付された注を参照した場合など、邦訳の頁数を付していない場合がある）

Worms, Frédéric (2004), *Bergson ou les deux sens de la vie*, PUF.

金森修（2004）「ベルクソンと進化論：2003 年冬の序文とともに」、金森修『自

46 生物学的（とくに進化論的）な観点をベースに、生命のある種の目的性（ベルクソンの言葉で、「徹底的な目的論」とは異なる目的性）を包括的に理解する哲学として代表的なものとして、ミリカン（2007）があるだろう。また、最近のギンズバーグ&ヤブロンカ（2021）では、まさに記憶力によって過去の経験についての諸情報を連合する「無制約連合学習」という概念をもって、生物一般の意識の進化的起源が論じられている。

- 然主義の臨界』、勁草書房、154–193 頁。
- ギンズバーグ, シモーナ、ヤブロンカ, エヴァ (鈴木大地訳) (2021) 『動物意識の誕生：生体システム理論と学習理論から解き明かす心の進化』(全2巻)、勁草書房。
- 杉山直樹 (2006) 『ベルクソン：聴診する経験論』、創文社。
- 平井靖史 (2018) 「時間は何を保存するか：ベルクソンにおける出来事個体の数的同一性の創設とイメージの問題」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する：拡張ベルクソン主義の諸展望』、書肆心水、224–256 頁。
- ミリカン, ルース (信原幸弘訳) (2007) 『意味と目的の世界』、勁草書房。
- 三宅岳史 (2012) 『ベルクソン：哲学と科学との対話』、京都大学出版会。
- 村山達也 (2017) 「潜在性とその虚像：ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開』、書肆心水、20–36 頁。
- 米田翼 (2016) 「ベルクソンとヴァイスマンの遺伝論」、『フランス哲学・思想研究』第 21 号、150–161 頁。
- (2021a) 「適応と再認：ベルクソンの行動の進化論」、『年報人間科学』第 42 号、15–29 頁。
- (2021b) 「自然における意識の位置づけを問いなおす：比較心理学とベルクソン』、『現代思想』第 49 巻第 12 号、39–49 頁。
- レーン, ニック (斉藤隆央訳) (2010) 『生命の跳躍：進化の 10 大発明』、みすず書房。